隼人族の森を渡る風

創造の現場から　第21回

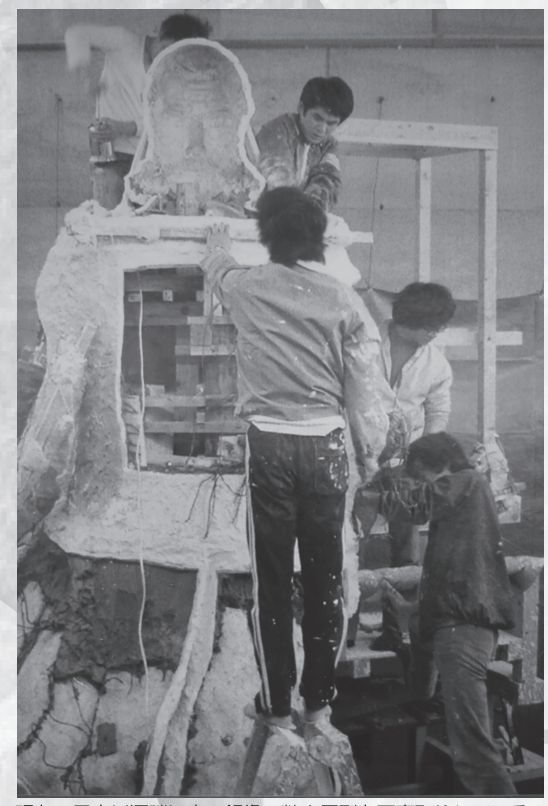
森の彫刻家　上床利秋

中村晋也先生制作の大久保どん展に寄せて

先生との出会いは私が鹿児島大学に入学したばかりの1年生の時に、当時の美術棟に「探検」で彫塑室のドアをノックした時から始まった。先生はその夜、ご自宅のアトリエで酒盛りの歓迎会を開いてくださった。私はべろべろに酔っ払ってしまった。心配された先生と先輩の楠元香代子さんは西鹿児島駅のホームで私が電車に乗り込み、発車するまで見送ってくださったことを記憶している。今からおおよそ40年前のことである。当時は学生の飲酒についてもおおらかな時代だった。

思い起こすと大久保利通像の制作は、私が大学2年生のころから本格的に始まった。それは中村先生の巨大作品制作第一弾と形容するにふさわしい大仕事だった。そういう歴史にも残る重要な制作を当時学生の自分がお手伝いさせていただけたのは本当にラッキーなことだった。

石膏取りの時などは先生のそれまでの教え子たちがほとんど全て集結して、祭りのような賑わいで、しかし慎重に作業は進められていった。なかでも、風になびくフロックコートの下向き部分に石膏をかけていく時が最も苦労した。水に溶かした石膏を天井に飛ばしていくようなもので、半分以上は自分自身に降りかかることを覚悟しなければいけない。全身をフル装備した上に新聞紙で三角帽子を作り、目だけ穴を2つ開けて装着。まるでKKKのような姿で石膏をかけて超難工事に挑んだことを懐かしく思い出す。



現在、甲突川河畔に立つ銅像の粘土原型を石膏取りしている貴重な写真。大久保像の右横でこちらを向いているのが筆者。顔と比較することで像の大きさがわかる。床から5メートルの高さで仕事をしていた。

ある日、現在の大久保像が立つ位置に長い竿や角材を運び、完成時の大久保像の頭までの位置の長さに組んで立てたことがある。先生は道路の向かい側に立ってその角材を眺めておられた。おそらく作品がそこに建立される時のイメージをされていたのだろう。先生の仕事に対する真剣な姿を教え込まれた思いだった。

当時西郷どん親派にとって、大久保どん銅像が立つことは許しがたい感情が心に残っていた時代。除幕式が無事に終わるまで、私と同級生の東伸之君がガードマンアルバイトとして像の前に立ち、真夜中像を護ったことはいい思い出になっている。

日展審査員　第一幼児教育短期大学　教授

現在、「中村晋也の大久保どん展」が松元の中村晋也美術館で開催されている。10月28日まで